

# 代数系と符号理論 (O) 第9回板書プリント

制作：植松友彦

2014.6.11

## 第8回の復習

- 部分体と拡大体
- 標数の定義
- 最小多項式の定義
- 最小多項式の性質
- 多項式表現とべき表現

## 1 リード・ソロモン符号

[定義 10.1] (RS 符号) 有限体  $\mathbb{F}_q$  の相異なる  $n$  個の元を  $x_1, \dots, x_n$  とする。  $k \leq n$  であるような正の整数  $k$  に対し、  $\mathbb{F}_q$  上の次数が  $k$  次未満の多項式の集合

$$\mathcal{P}_k \triangleq \{f(x) \in \mathbb{F}_q[x] : \deg f(x) < k\}$$

を考える。このとき、RS( $n, k$ ) 符号は、

$$RS(n, k) \triangleq \{(f(x_1), f(x_2), \dots, f(x_n)) \in \mathbb{F}_q^n : f(x) \in \mathcal{P}_k\}$$

として定義される。

### RS 符号の性質

- 有限体  $\mathbb{F}_q$  上の RS 符号の符号長は高々  $q$  である。
- RS 符号は有限体  $\mathbb{F}_q$  上の線形符号である。
- $\mathcal{P}_k$  に属する多項式  $f(x) \neq g(x)$  について対応する RS 符号語は異なる。すなわち

$$(f(x_1), f(x_2), \dots, f(x_n)) \neq (g(x_1), g(x_2), \dots, g(x_n))$$

- RS( $n, k$ ) 符号の最小距離  $d$  は  $n - k + 1$  である。

## 2 Sudan による $RS(n, k)$ 符号の復号法

初期設定:  $t = \lfloor \frac{n-k}{2} \rfloor$

入力: 受信語  $\mathbf{r} = (r_1, r_2, \dots, r_n)$

1. 次の一次方程式の非零の解を求める。

$$\begin{bmatrix} 1 & x_1 & x_1^2 & \dots & x_1^{n-t-1} & r_1 & r_1 x_1 & \dots & r_1 x_1^t \\ 1 & x_2 & x_2^2 & \dots & x_2^{n-t-1} & r_2 & r_2 x_2 & \dots & r_2 x_2^t \\ \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ 1 & x_n & x_n^2 & \dots & x_n^{n-t-1} & r_n & r_n x_n & \dots & r_n x_n^t \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Q_{0,0} \\ Q_{0,1} \\ \vdots \\ Q_{0,n-t-1} \\ Q_{1,0} \\ Q_{1,1} \\ \vdots \\ Q_{1,t} \end{bmatrix} = \mathbf{0}$$

2. 多項式  $Q_0(x)$  と  $Q_1(x)$  を

$$Q_0(x) = \sum_{j=0}^{n-t-1} Q_{0,j} x^j, \quad Q_1(x) = \sum_{j=0}^t Q_{1,j} x^j$$

によって定める。

3.  $Q_0(x)$  が  $Q_1(x)$  で割り切れるならば、

$$g(x) = -\frac{Q_0(x)}{Q_1(x)}$$

とし、 $(g(x_1), g(x_2), \dots, g(x_n))$  を送信符号語とする。もし割り切れなければ、復号に失敗したとする。

### 復号の計算例 (教科書の例 10.2 とは違う計算例)

例 10.1 の符号語  $\mathbf{c} = (0, \alpha^2, \alpha, 1)$  に誤り  $\mathbf{e} = (0, 1, 0, 0)$  が生じて受信語  $\mathbf{r} = (0, \alpha, \alpha, 1)$  が受信されたとする。  $n = 4, k = 2, t = \lfloor (4-2)/2 \rfloor = 1$  に注意すれば、連立方程式の係数行列は、

$$\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \cdot 1 \\ 1 & \alpha & \alpha^2 & \alpha & \alpha \cdot \alpha \\ 1 & \alpha^2 & (\alpha^2)^2 & \alpha & \alpha \cdot \alpha^2 \\ 1 & 0 & 0^2 & 1 & 1 \cdot 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & \alpha & \alpha^2 & \alpha & \alpha^2 \\ 1 & \alpha^2 & \alpha & \alpha & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix}$$

となる。これを行基本変形すると、 $\alpha^2 + \alpha + 1 = 0$  に注意して、

$$\begin{array}{l}
 \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & \alpha & \alpha^2 & \alpha & \alpha^2 \\ 1 & \alpha^2 & \alpha & \alpha & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \end{bmatrix} \xrightarrow{1 \text{ 行目を他の行に加える}} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & \alpha^2 & \alpha & \alpha & \alpha^2 \\ 0 & \alpha & \alpha^2 & \alpha & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 & 0 \end{bmatrix} \\
 \\
 \begin{array}{l}
 \xrightarrow{2 \text{ 行目を } \alpha \text{ 倍する}} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & \alpha^2 & \alpha^2 & 1 \\ 0 & \alpha & \alpha^2 & \alpha & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 1 & 0 \end{bmatrix} \xrightarrow{\begin{array}{l} 2 \text{ 行目を } \alpha \text{ 倍して } 3 \text{ 行目に加える} \\ 2 \text{ 行目を } 4 \text{ 行目に加える} \end{array}} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & \alpha^2 & \alpha^2 & 1 \\ 0 & 0 & \alpha & \alpha^2 & \alpha^2 \\ 0 & 0 & \alpha & \alpha & 1 \end{bmatrix} \\
 \\
 \xrightarrow{3 \text{ 行目を } \alpha^2 \text{ 倍する}} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & \alpha^2 & \alpha^2 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & \alpha & \alpha \\ 0 & 0 & \alpha & \alpha & 1 \end{bmatrix} \xrightarrow{3 \text{ 行目を } \alpha \text{ 倍して } 4 \text{ 行目に加える}} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & \alpha^2 & \alpha^2 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & \alpha & \alpha \\ 0 & 0 & 0 & 1 & \alpha \end{bmatrix}
 \end{array}
 \end{array}$$

が得られる。従って、与えられた連立方程式は、

$$\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & \alpha^2 & \alpha^2 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & \alpha & \alpha \\ 0 & 0 & 0 & 1 & \alpha \end{bmatrix} \begin{bmatrix} Q_{0,0} \\ Q_{0,1} \\ Q_{0,2} \\ Q_{1,0} \\ Q_{1,1} \end{bmatrix} = \mathbf{0}$$

と等価である。この方程式の非自明な解は、 $Q_{1,1} = 1$  と置いて、下側の式から順に代入することで、

$$\begin{aligned}
 Q_{1,0} &= -\alpha Q_{1,1} = \alpha \\
 Q_{0,2} &= -\alpha Q_{1,0} - \alpha Q_{1,1} = -\alpha^2 - \alpha = 1 \\
 Q_{0,1} &= -\alpha^2 Q_{0,2} - \alpha^2 Q_{1,0} - Q_{1,1} = -\alpha^2 - 1 - 1 = \alpha^2 \\
 Q_{0,0} &= -Q_{0,1} - Q_{0,2} = -\alpha^2 - 1 = \alpha
 \end{aligned}$$

となる。従って、

$$Q_0(x) = x^2 + \alpha^2 x + \alpha, \quad Q_1(x) = x + \alpha$$

が得られる。これから、情報多項式として

$$g(x) = -\frac{Q_0(x)}{Q_1(x)} = \frac{x^2 + \alpha^2 x + \alpha}{x + \alpha} = x + 1$$

が得られ、

$$(g(1), g(\alpha), g(\alpha^2), g(0)) = (0, \alpha^2, \alpha, 1)$$

が送信符号語となる。